



OVERSEAS

Democratic Socialist Republic of Sri Lanka

— スリランカ民主社会主義共和国 —

海外事情



スリランカ滞在記



杉山 宗大 SUGIYAMA Munehiro

株式会社建設技術研究所/東京本社
地球環境センター

あまり知られていない身近ですぐに行ける国

「スリランカ」という国名を聞いて、どこにある国かすぐにわかる人はあまり多くないであろう。インドの南に位置し、面積6万5,610km²（北海道の0.8倍）、人口2千万人強の小さな島国で、正式な国名はスリランカ民主社会主義共和国である。

スリランカといえば紅茶や宝石の産地として知られている程度で、日本とはあまり縁のない遠い国のように思われているであろうが、実はすぐ身近で行きやすい国なのである。日本からスリランカへは大変便利な直行便が就航しており、スリランカ航空が週に約3便、成田から最大都市コロンボまで片道約8～9時間で行くことができる。そんなスリランカに約1ヶ月間滞在する機会があったため、現地で見聞したことを紹介する。

スリランカの玄関口

スリランカの玄関口バンダラナイケ国際空港は最大都市コロンボの近郊に立地しており、スリランカ航空のハブ空港で、日本でいう成田空

港のような存在である。滑走路が1本だけの小規模な空港でありながら、日本のODAで近代化が行われたターミナルビルが建ち、空港内には各種飲食店や両替、携帯電話販売店などが集約されている。滞在者にとって必要なものをここで一通り調達することが可能で、非常に便利であり、空港内にいる限り途上国に来たという印象はない。

暑い国

スリランカに到着したのは17時半頃であったが、10月下旬だということに気温が30℃で湿度も高かった。コロンボ近郊は熱帯雨林気候に属し、年間を通じて気温が高く降水量が多い地域である。雨は夕立のように短時間で降ることが多く、ほぼ毎日晴れと雨を繰り返す不安定な天候である。そのため、現地の人々は雨が降ると屋根のあるところで雨宿りし、天候が回復するのを待ってから再び外を歩くことが多い。

私は趣味が街歩きということもあり、休日には街中に出てみたのだが、気温が30℃前後もあり、長時間徒歩で移動すると汗が止まらず、体

力的にとてもきつい。近代的な建物のほとんどにエアコンが普及しているため、暑さで疲れたときは最寄のスーパーマーケットなどで涼みながらの行動になった。

激しい交通渋滞

スリランカでタクシー等に乗ると、まず感じるのは交通渋滞の激しさである。トゥクトゥクという3輪タクシーは頻繁に走っているのが、乗っても渋滞のため到着時刻がまったく読めない(写真1)。そのため、タクシーで出勤する際は、かなり時間に余裕を持って出発しなければならない。激しい交通渋滞の原因はさまざまありそうだが、次の要因が大きいと考えている。

まず、信号整備が進んでいないことである。最大都市コロンボの街中でさえ信号をあまり見かけない。多くの交差点は警察官による手動の交通整理に頼っており、これがあまりうまく機能していないように感じる。

次に、道路網整備の遅れである。スリランカでは都市間高速道路がようやく開通したばかりであり、日本



写真1 コロンボ市内の交通渋滞。緑色の車両がトゥクトゥク



写真2 上から順にシンハラ語、タミル語、英語の看板



写真3 街中にある仏教寺院



写真4 米中心のスリランカの食事



写真5 スーパーで売られている蚊取り線香

の首都高のような都市高速は存在しない。交差点も信号機のない平面交差が多いため、街中では常にごくどこかで渋滞が起きる。

最後に、運転マナーの悪さがある。どのドライバーも、隙間があると我先にと平気で割り込みしてくる。日本のような譲り合いの精神はまったくといっていいほどない。

どこか日本と似ている国

スリランカの公用語はシンハラ語とタミル語の2言語であり、それぞれ独自の文字で表現されるため、外国人はまず理解できない。しかしながら、元は英国領であったため、

道路標識や公共施設の看板などには英語を加えた3カ国語併記が広く普及している。英語も市民に広く通じるため、英語が話せれば特に不自由はない(写真2)。そんな異国の地においても、街中を見ていると、どこか日本と似ている点が見つかる。

1つ目は、英国領であったため自動車は右ハンドル・左側通行であり、街中には日本の中古車があふれている。入国日に乗ったタクシーはトヨタプリウスで、カーナビゲーションの表示は日本語表記のままであった。

2つ目は、敬虔な仏教徒が多いことである。街中には寺院や仏像が多

く、花や食べ物などのお供えがされている。温和・真面目な性格で生き物等を敬う人々が多く、日本人とも相通するものがある(写真3)。

3つ目は、米食文化であり、基本的に1日3食、米を食べることである。料理はカレーが中心であるが、比較的あっさりしてマイルドで、日本人の口に合いやすい(写真4)。日本食の店もわずかながら存在するが、現地では高級料理扱いであり、普通のラーメンが1杯1,000円以上する。

また、蚊が多いため、日本発祥の蚊取り線香がスリランカでも現地生産され普及している(写真5)。この



写真6 コロンボ中心部で建設中の超高層ビル



写真7 街中で存在感を放つ中国企業



写真8 聖地キャンディにある仏歯寺

ように、日本とは遠く離れた国であっても、文化的・経済的なつながりをいづらか感じられる国である。

成長著しい国

コロンボの街は高層ビルの建設ラッシュで、いたるところで建設中のビルを見ることができる。港の隣では海を埋め立てて新たな街を建設中であり、コロンボの街は拡大し続けている(写真6)。超高層ビルだけではなく、巨大な商業施設も建設中であり、完成予想図には、日本のアウトレットモールを連想させるような近代的で高級感あるショッピングセンターが描かれている。

庶民の暮らしも経済成長に伴い変化しているようである。スマートフォンを持っている人が多く、街中で

のバスやタクシー利用に便利なアプリが配信されている。高齢のタクシー運転手も器用にスマートフォンを操作して配車状況などを確認している。

服装面では、年配の女性は伝統衣装のサリーを着ることが多いが、若者は海外の有名ブランドのファッションに身を包んでいる。ちなみに、スリランカの女性はオフィスでもサリーを身につけるのが普通である。

米食文化の国ではあるが、洋食化の波がスリランカにも押し寄せている。欧米のファストフードチェーンが何社も進出しており、街中でハンバーガーやホットドッグを購入する人も珍しくはない。

テレビやAV機器等のデジタル家電も広く浸透している。主に

SAMSUNGやLG、HUAWEIなどのメーカーが人気である。わずかながらソニーやパナソニックの製品もみられるが、日本メーカーは苦戦しているようである。

このように、日々新しい製品が海外から入ってくる途上国では、それらに対する国民の適応スピードも速い。日本人がビジネス等で海外進出するにあたり、こうしたスピード感を意識して現地への売込みを図ることが重要であると感じた。

スリランカにおいて存在感を増す国

発展著しいコロンボの街を見て気づいたのは、中国の存在感である。高層ビルの建設現場のほとんどは中国の建設会社が請け負って



写真9 キャンディ湖にいる体長約1.5mの水トカゲ



写真10 ダンブッラの石窟内部

り、街中では中国人労働者を見かける(写真7)。中国語の看板を掲げた店もいくつかある。

中国はアジアからヨーロッパに至る経済圏である「一帯一路構想」を推進しており、スリランカはその海上ルートの要衝に位置している。スリランカ南部の都市では、港湾の運営権を中国が取得している。このように、中国は着々とスリランカの政治・経済に大きな影響を与えている。

私のような東洋人がコロンボの街中を歩いていると、多くの場合、中国人と間違われる。そのくらい、この国において中国の存在感は大きい。存在感を増す中国に対して、現地の人々がどのような印象を抱いているかは分からないが、相対的に日本に対する印象が薄いと感じた。日本もJICA等のプロジェクトを通じてこれまでスリランカに多大な貢献をしてきているところであるが、これらの成果をいかに現地の人々にわかりやすく示していくかが課題だと感じた。

隠れた観光名所

スリランカは北海道の約80%の面積しかない小さな国であるが、こ

の狭い国土の中に世界文化遺産6件、世界自然遺産2件を有しており、観光のポテンシャルは高い。

①聖地キャンディ(1988年登録)

キャンディはスリランカ中部の山間に位置し、街全体が世界文化遺産である。ここにはブッダの歯を奉っているとされてスリランカ国民の多くの信仰を集める「仏歯寺」がある(写真8)。また、かつて英国領になる前に存在したキャンディ王国の首都でもあった。日本の都市で例えるなら京都のような存在である。

この街最大の見所である仏歯寺では、肝心のブッダの歯がどのようになっているか分かりづらかったが、境内は参拝客で込み合っており、スリランカ人の信仰心の深さが分かる。敷地内にはかつての王宮だった建物も残されており、世界仏教博物館もあって仏教の聖地となっている。

仏歯寺の前には人造のキャンディ湖が広がり、周囲を山に囲まれた狭い盆地でありながら風光明媚な土地でもある。ちなみに、キャンディ湖のほとりには巨大な水トカゲが生息しているので、爬虫類が苦手な方は要注意だ(写真9)。

②ダンブッラの黄金寺院(1991年登録)

ダンブッラはスリランカ北中部にある内陸の街であり、街の規模は小さいが複数の幹線道路が交わる交通の要衝となっている。コロンボからスリランカ北部に行く長距離バスの多くがこの街を経由する。郊外になだらかな岩山があり、そこに黄金寺院がある。

黄金寺院内の岩山を登ると、中腹に複数の時代を経て掘られた大小5つの石窟がある。石窟の中には数十体の仏像やストゥーパ(卒塔婆)が奉納されている(写真10)。天井にも無数の仏画が描かれており、仏教の世界観を再現した神秘的な空間が広がっている。

成長のポテンシャルを秘めた国

スリランカは小さな島国ではあるが、人々はみな優しく、治安も良好で、高い成長のポテンシャルを秘めた国である。スリランカが現在抱える多くの課題は、かつて日本が経験した問題も多く、今後も日本の技術的な貢献が大きく期待される国であると感じた。